



ピロリ菌について

胃もたれや吐き気、空腹時の痛み、食後の腹痛、食欲不振
これらの症状を「胃に負担をかけすぎた」や「加齢現象だ」
「ただの胃炎だろう」と思い込んで放置していませんか。
これらの症状が続くときには、慢性胃炎、胃潰瘍、十二指腸
潰瘍などの病気が疑われます。胃炎、胃潰瘍、十二指腸潰瘍
の患者さんは、ピロリ菌に感染していることが多く、慢性胃炎の発症の原因
や、潰瘍の再発に関係していることが、わかっています。
また、このピロリ菌は服薬による「除菌療法」で退治することができますので、一度病院で相談してみましょ



ピロリ菌（ヘリコバクター・ピロリ）は胃の粘液の中に住み着いている細菌です。子どもの頃に感染し、一度感染すると多くの場合、除菌しない限り胃の中に棲みつづけます。ピロリ菌の感染が続くと感染範囲が



「胃の出口」の方から「胃の入口」の方に広がって、慢性胃炎（ヘリコバクター・ピロリ感染胃炎）になります。この慢性胃炎が、胃潰瘍や十二指腸潰瘍、萎縮性胃炎、胃がん、さらには全身的な病気などを引き起こすおそれがあります。

胃がんの最大の原因となるのがピロリ菌です。ピロリ菌は胃の粘膜に住み着くことでピロリ感染胃炎を起こして胃がんを発症しやすい状態を作り出し、感染期間が長くなるほど胃がんの発症率が増加します。ピロリ菌に感染しているかどうかを知り、定期的に



内視鏡検査を行えば、胃がんの早期発見に役立ちます。胃がんが粘膜下層までにとどまっている早期がんの段階で適切な治療を受ければ、100%近くの患者さんが治癒することがわかっています。

ピロリ菌感染検査

ピロリ菌検査には、内視鏡で胃の表面を観察したり組織を採取する検査のほか、尿素を含む検査薬をのんだ後の呼気を通常の呼気と比べる尿素呼気試験、血液や尿の中にピロリ菌の抗体があるかどうかを調べる抗体検査、便の中にピロリ菌がいるかどうかを調べる便中抗原検査があります。



ピロリ菌の除菌治療



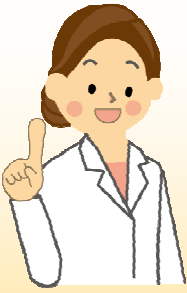
検査の結果、ピロリ菌感染が判明した場合は除菌治療を行います。ピロリ菌の除菌療法は、2種類の「抗菌薬」と「胃酸の分泌を抑える薬」合計3剤を服用します。1日2回、7日間服用する治療法です。すべての治療が終了した後、4週間以上経過してから、除菌できたかどうかの検査を行います。この検査でピロリ菌が残っていなければ、除菌成功です。この時点で75%の人が除菌に成功します。1回目の除菌療法で除菌できなかった場合は、再び7日間かけて薬を飲む、2回目の除菌療法を行います。2種類の「抗菌薬」のうち1つを初回とは別の薬に変えて、再び除菌を行います。2回目の除菌療法までに約95%の人が除菌に成功します。

除菌療法を成功させるために、自分の判断でお薬を中止したり、のみ忘れてしまうと、除菌がうまくいかず、治療薬に耐性をもったピロリ菌があらわれて、薬が効かなくなることがあります。

除菌療法を始めると、副作用があらわれることがあります。抗菌薬を用いると、大腸の中にいる良い働きをする細菌まで除菌され、軟便や下痢を起こすことがあります。薬の服用期間が終了すれば元に戻ります。ほかに、食べ物の味がおかしいと感じたり、苦みや金属のような味を感じたなど、味覚異常があらわれる人もいますが、多くの場合、2、3日でおさまります。

肝臓の機能をあらわす検査値の変動が見られることや、まれに、かゆみや発疹などのアレルギー反応があらわれる人もいます。

ただし、服用を続けているうちに下痢や味覚異常がひどくなった場合には、我慢せず、医師または薬剤師に相談してください。



上下水道が十分完備されていなかった戦後の時代に生まれ育った団塊の世代以前の人々のピロリ感染率は約 80%前後と高いのですが、若い世代の感染率は年々低くなっています。ピロリ菌感染を予防する方法は、よくわかっていません。親から子への食べ物の口移しには注意が必要です。

上下水道が完備され衛生環境が整った現代ではピロリ菌の感染率は著しく低下しており、予防についてあまり神経質にならなくても大丈夫です。

その他、ピロリ菌の除菌について気になることがありましたら、医師や薬剤師にご相談ください。

(武田薬品工業株式会社 / きょうの健康 参照)



オーロラ薬局

TEL 019-635-1233

FAX 019-635-4555

オーロラ薬局 沼宮内店

TEL 0195-61-3883

FAX 0195-62-6868

オーロラ通信はバックナンバーを含めホームページでもご覧になれます。

<http://www.iwate-aurora.com/>